

# みんなの童話

## かぐじゅうになつた うさぎはほん げん



広い原っぱで牛のモウばあちゃん、草をもぐもぐ何かがぶつぶつ行ったり来たり。

『草刈ができないから 好きなだけ自分で食べておくれ』と、汗をふきふきおじいさんは言ったけれど、

とうに草は食べきってしまった、モウばあちゃんは、ほねと皮ばかりに。すっかり年をとっていた。

どっこしをおろし、畑の向こうのじいさんの家を見た。

家族がおいしそうにごはんを食べている。いいなあ。わたしも仲間がほしいなあ。モウばあちゃんは、しみじみ思った。

ある朝、キジの家族がかけ足で

やってきて、

「モウばあちゃん、おねがい。この子ちょっとあずかってくたさいな。モウばあちゃんは見つげやすいので、まよわずもどつて来れるから助かるわ。朝ごはんを探しに行ってください」

じっとしているだけなのに、モウばあちゃんは、モウモウとわらった。

お日さまが上がってくると、ウサギの親子がさんぽにきた。モウばあちゃんは、丸くなって温まっていた。ウサギは何も気づかない。「ちゅうどいいところに大きな石があるわ。ここで休みましょう。とつても温かくて、すわりごちがいいわねえ」

モウばあちゃんの背中によりかかり、葉っぱのおべんとうをたらふくたべたら一眠り。

その間にモウばあちゃんは、ちらばっている葉っぱの残りを静かに片付けた。

空ではカラスが、モウばあちゃんの背中めがけて 食べ物おとし。

「当ったカアア！ 外れたカア！モウばあちゃん、坂道に草あるよアオアオ たくさん アオアオ」

と、森へ飛んでいった。

どれどれ、出かけてみようかな。モウばあちゃんは立ち上がった。

すると、サルたちが森の方で横一列に走ったり、止まったり『だるまさんがころんだ』をしながら木の奥取り。両手や口にくわえても持ち切れず、

「モウばあちゃん、おいしいから食べてね。食べて！食べて！」

母さんザルのまねをして、子ザルが実を一列に並べていく。

モウばあちゃんは、モウモウモウとわらった。

モウばあちゃんは、少し太ってきた。それよりもみんなに会うのがうれしくて、うれしくてたまらない。一人になるとモモウーとわらった。

ある夜、じいさんの家のイヌがハアハアさせて、原っぱへかけ上がってきた。

「野菜どろぼうがいる！三人だ。モウばあちゃん、力貸してくれ」

あとから追いついたネコは、

「わたし、みんなに知らせてくる」スウー スツとす早く走って、モグラに知らせた。モグラは近道で周りのみんなに伝えた。

その間にモウばあちゃんとイヌは、作戦を立てた。

大きなモウばあちゃんの背中にキジとカラスとサルが乗って、羽とじっぽとつので、ものすごく大

きいかいじゅうになり、どろぼうに近づく。

モグラは畑の道あんない。足音ひそめてのっしのっし、出発だ。

ウサギは、一足先回り。どろぼうの足元でそろって丸くなる。

静かないなかの夜にとつせんフンフンフンやかましい合図。

ウサギがいっせいにどろぼうの足首をかじりだした。

「いたっ！いてて、なんだー！」

どろぼうは、足首のいたさを、手さぐりしながら、顔を上げると、

カアクックキー ミヤアー  
カウカウ  
ワンギヤアキー

ぶきみな鳴き声のかいじゅうがどんどんせまって来るではないか。

どろぼうは、びっくりぎょうてん。声も出す何もとらず、ころびながら逃げていった。

原っぱは朝からにぎやかだ。みんなでよくやった、うまかった、とわらいが止まらない。わくわくして体もとまらない。モウばあちゃんは、モウたのしいモウうれしいと、何度もわらった。しまいに

「仲間がいるモウーモウ最高」

と、さげんだ。

みんながどつとわらった。

しるやま会員 やまさきののこ